

---

## J. パッヘルベルのエアフルト時代

——エアフルト時代の作品研究に向けて——

近松 博郎

### 0. はじめに

ヨーハン・パッヘルベル Johann Pachelbel (1653–1706) は《カノンとジーク》の作曲者としてこんにち広く知られているが、ドイツ・バロック音楽に及ぼした影響という面からみても音楽史研究上重要な音楽家である。とりわけ 20 世紀末に初めて彼についての包括的な研究が行なわれたのを皮切りに<sup>1)</sup>、近年『パッヘルベルオルガン作品全集』<sup>2)</sup>、『パッヘルベル作品主題目録』<sup>3)</sup>、『パッヘルベル声楽作品全集』<sup>4)</sup> が相次いで刊行され、本格的な研究の土台が整備されつつある。

パッヘルベルの活動期は中期のエアフルト時代 (1678–1690) と最晩年の後期ニュルンベルク時代 (1695–1706) の二つが中心となるが、これまでのところ活動期で区切ったパッヘルベルの作品研究といったものはほとんど行われていない<sup>5)</sup>。また大都市にあって円熟期の作品が次々と生み出された後期ニュルンベルク時代に対し、エアフルト時代は注目を浴びにくいということもあろう。当時のエアフルトはマインツ大司教兼選帝侯の支配下にありながら市民の多くはプロテスタントであった。同市の独特で複雑な政治体制はパッヘルベルの創作活動にも関わってくるものである。またちょうどパッヘルベルのエアフルト滞在時に猛威を振るったペストの流行は、彼の創作にも直接的に反映された。

本研究はこのエアフルト時代におけるパッヘルベルの音楽活動と作品を対象とし、彼のエアフルト時代の作品様式といったものをどこまで抽出し、それを描定

---

1) Welter (1998).

2) 正式なシリーズ名は以下の通り。現在も刊行中である。Johann Pachelbel, *Complete Keyboard Works for Keyboard Instruments*, hrsg. von Michael Belotti (Colfax, North Carolina: Wayne Leupold, 1999 ff).

3) Perreault (2004).

4) 正式なシリーズ名は以下の通り。全 11 巻が刊行された。Johann Pachelbel, *Sämtliche Vokalwerke*, hrsg. von Wolfgang Hirschmann, Katharina Larissa Paech und Thomas Röder (Kassel: Bärenreiter, 2008–2015).

5) パッヘルベルのエアフルト時代の活動に焦点を当てたやや古い先行研究として Orth (1959) がある。ただし作品様式の研究には踏み込んでいない。

できるか／できないかを追究しようとするものである。その第一歩として本稿では、エアフルトの歴史的・社会的背景を概観つつ、各種資料や近年の研究に基づき当地におけるパッヘルベルの音楽活動を整理・確認し、この時代に作曲された可能性の高い中心的作品を絞り込むところまでを進め、今後作品研究を進めていく上での準備としたい<sup>6)</sup>。

## 1. パッヘルベルの活動地

パッヘルベルはその生涯を通じて、ドイツ語圏各地のオルガニスト職を歴任した。1653年、南ドイツの大都市ニュルンベルクに生まれ、早くから音楽的な才能を示した。アルトドルフ、レーゲンスブルクで学んだ後、1673年には帝都ウィーンの聖シュテファン大聖堂の副オルガニストに就任し、当時この大聖堂の正オルガニストであった高名なヨーハン・カスパール・ケルル Johann Caspar Kerll (1627–1693) の作品から学んだと18世紀の資料は伝えている<sup>7)</sup>。

数年後には中部ドイツのアイゼナハに移り、ザクセン＝アイゼナハ公ヨーハン・ゲオルク Johann Georg (1634–1686) の宮廷オルガニストとなった。当地では、かのヨーハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685–1750) の父であり街楽師であったヨーハン・アンブロージウス・バッハ Johann Ambrosius Bach (1645–1695) と交流を深めている<sup>8)</sup>。パッヘルベルがわずか一年でこの地を去った理由は不明である。小都市の音楽環境が合わなかったか、公爵の弟であるザクセン＝イエーナ公ベルンハルト Bernhard (1638–1678) が亡くなったことが兄の宮廷にも影響を及ぼしたのか<sup>9)</sup>、はたまたアンブロージウスが嘆いているよう

---

6) 本稿は2021年3月20日に明治学院大学キリスト教研究所で行なった研究発表、「J. パッヘルベルのエアフルトにおける音楽活動——マインツ新選帝侯就任祝賀アリアの作曲・上演を中心に——」に基づく。

7) Doppelmayr (1730: 259); Mattheson (1740: 244). これに対し、ペロッティは聖シュテファン大聖堂に記録が無いことから、パッヘルベルが副オルガニストを務め、またケルルから学んだという点に関して慎重な立場をとっている。Vgl. Belotti (1997: 1507).

8) アンブロージウスは1680年に娘ヨハンナ・ユーディタの名付け親をパッヘルベルに依頼し、1686年からは息子クリストフを弟子入りさせている。クリストフを含め、エアフルトでのパッヘルベルの弟子たちについては第4章で後述。

9) ベルンハルトの服喪期間中、アイゼナハの宮廷音楽家たちの活動も大幅に縮小された可能性が指摘されている。Nolte und Butt (2001: 846).

---

に当地の給料が良くなかったからか<sup>10)</sup>、様々な推測がなされている。パッヘルベルについて「完全にしてまれなヴィルトゥオーゾ」と証した宮廷楽長ダニエル・エーベルリン Daniel Eberlin (1647–ca. 1714) の推薦状を受け取ってアイゼナハで解職された後、わずか一か月ほどでエアフルトのプレディガー教会オルガニストとして迎えられた。以後 1690 年までの 12 年間をこの地で過ごすこととなるが、これはそれからシュトゥットガルト、ゴータにおける短い活動を経たのち、1695 年に郷里の聖ゼーバルト教会オルガニストに就任してから没するまでを過ごした後期ニュルンベルク時代 11 年間に並ぶ長期間となる。

## 2. エアフルトとパッヘルベル

### 2-1. エアフルト略史

こんにちドイツ、テューリンゲン州の州都となっているエアフルトは長い歴史を持つ。742 年に司教ボニファティウスが新たに開拓したエアフルトの地に司教区を置くことを教皇に求め、これが承認されたのが始まりとされる。ボニファティウスはさらに北へと宣教を続けるが、活動のさなかに落命し、エアフルト司教区はマインツ大司教区に編入された。10 世紀終わりにはマインツ選帝侯領となり、以後マインツは聖俗両面でエアフルトに対する力を持つこととなる<sup>11)</sup>。13 世紀にはテューリンゲンで最も豊かな街となった<sup>12)</sup>。1379 年にケルンに次ぎ神聖ローマ帝国で二番目の大学が創設されると (1392 年開講)、ドイツ人文主義の中心地の一つとなった。宗教改革者マルティン・ルター Martin Luther (1483–1546) は 1501 年にエアフルト大学に入学し哲学を学んでいるが、彼が 1505 年、エアフルト近郊シュットテルンハイムで激しい雷雨に遭い、これを機に修道士になることを決意したという逸話はよく知られる。ルターの教義は市参事会にも好意的に受け入れられて徐々に広まり、1517 年、モーリッツ教会において初めての福音主義

---

10) 1684 年、エアフルト市からアンブロージウスに対し楽団長職提供の申し入れがあった。アンブロージウスはアイゼナハの議会に宛てて辞職願をしたため、アイゼナハでは 6 人の子どもを抱え、一人前の弟子 3 人と人数の定まらない見習いを雇う経済的負担は大きく、また公的な服喪期間のせいで臨時収入が減り、彼の商売の邪魔をする「酒場の楽師」(フリーの音楽家) との諍いも絶えないと訴えたが、この辞職願は聞き入れられなかった。ヴォルフ (2004 : 34)。

11) Seidel (2004: 9)。

12) Schaal und Kraft (1995: 141)。

礼拝が行われた<sup>13)</sup>。

17世紀前半にドイツ全土を荒廃させた三十年戦争の際に、エアフルトは中立的な立場を維持した。このことはカトリック勢とプロテスタント勢の双方から協力を求められることに繋がり、農民たちは軍隊への食料供給を、街の市民たちは兵士たちへの宿泊場所提供を強いられ徴兵も行われた<sup>14)</sup>。この戦争によって約19,000人の市民のうち三分の一が命を落としたといわれる<sup>15)</sup>。

戦後に締結されたウェストファリア条約は皇帝の権力を制限し、各地の領邦君主への権限委譲を認める内容であったため、帝国直轄領となることを目指してきたエアフルトにとっては不利なものとなった。世俗面における支配権を増強させ、フランス軍の後ろ盾も得たマインツ大司教兼選帝侯の圧力により、エアフルトは1664年に神聖ローマ帝国から引き離され、街の自治権は否定された<sup>16)</sup>。さらに同年11月、マインツ大司教ヨーハン・フィーリップ・フォン・シェーンボルン **Johann Philipp von Schönborn** (1605–1673) は司教座教会参事会員を総督としてエアフルトに送り込み、以後街の政治は常に総督の監視下に置かれることとなる。街にはヴェルツブルクのマリエンベルク要塞にならってペータースベルク要塞が建設され、市民の大半がプロテスタントである街をカトリック勢力が支配するための拠点となった<sup>17)</sup>。

エアフルトにおける音楽の中心は修道院と教会であった。街の高台に並んで聳え、中世以来の威容を今日に伝える聖母マリア大聖堂と聖セヴェルス教会（【図像1】）では古くから多くの音楽家が活躍した。もっとも広大で豊かな施設を有していたベネディクト会のペータース修道院は典礼を通じた音楽育成の伝統を持っており、音楽上特に重要な施設であった<sup>18)</sup>。人文主義と宗教改革の時代にはエアフルトの音楽活動は一層高揚した。神学者・宗教改革者のアントーニウス・ムーザ **Antonius (Anton) Musa** (ca. 1485–1547) はエアフルト大学で学び自ら作曲を手がけた人物で、ルターの師でもあった。1524年にはプロテスタント最初期の聖歌集の一つ『エアフルト綱要 **Erfurter Enchiridion**』が刊行される。市のギムナジウ

---

13) Seidel, aaO. 13.

14) Ebd. 14.

15) Ebd. 15.

16) Orth (1959: 104).

17) Ebd. 104–105.

18) Schaal und Kraft, aaO. 142.



ムは音楽育成の重要な拠点であり、同校の聖歌隊が様々な場で必要とされた。聖アンドレーアス教会でカントルを務め、後にレグラール教会学校の校長となったミヒャエル・アルテンブルク Michael Altenburg (1584–1640) は傑出した人物として知られ、彼がスウェーデン王グスタフ・アドルフ Gustav Adolf (1594–1632) のために書いたといわれる《恐れるな、汝小さな群れよ Verzage nicht, du Häuflein klein》は有名になった<sup>19)</sup>。17世紀からはドミニコ会の修道院であったプレディガー教会が中心となるが、これについては次節で述べる。

## 2-2. プレディガー教会とパッヘルベル

エアフルトにきたパッヘルベルの仕事場となったのがプレディガー教会である。プレディガー教会は、1229年にエアフルトに定住したドミニコ会（説教者兄弟会）<sup>プレディガー</sup>の托鉢修道士達によって建設された修道院を起源とする<sup>20)</sup>。宗教改革の時代には市民の多くがプロテスタントとなり、当地におけるドミニコ会の活動は終焉を迎えた。1559年から同教会は市の主要プロテスタント教会となる。1664年と1736年には回廊と修道院の遺構が全面的に撤去されたが、残された翼部はかつての姿を偲ばせている。

ヴァイマルの宮廷オルガニストとして転出したヨーハン・エフラー Johann Effler (ca. 1640–1711) の後任として、1678年6月19日付でパッヘルベルは同教会のオルガニストに就任した。教会当局が発行した任命書が現存し、これは当時のオルガニストの待遇と具体的な職務内容を伝える貴重な資料となっている<sup>21)</sup>。4半期の俸給は50グルデンで、1684年以降は60グルデンに昇給した。この他に家賃補助、オルガン管理費が支給され、各種の祭日や市の公的行事、結婚式の際には臨時収入があった。献金や穀物農場の寄進から穀物も支給された。パッヘルベルの収入は主任牧師に次ぐ高給で、こうした収入により彼は1684年、アンブロージウスのいところで1682年にペストで死去したヨーハン・クリスティアン・バッハ Johann Christian Bach (1640–1682) の妻子からユンカーザント1番地の「銀の

19) Orth, aaO. 102.

20) Leisten (1992: 53–55).

21) この任命書全文のトランスクリプションが次の校訂譜の序文に掲載されている。Pachelbel (1901: VII–VIII). 以下に本稿脚注で示す任命書原文はこのトランスクリプションによる。

---

袋館 Zur silbernen Tasche』と呼ばれる家を購入した。1690 年にエアフルトを離れた後も、1698 年にトービウス・バッハ Tobias Bach（生没年不詳）に売却するまでこの家を所有し続けたという<sup>22)</sup>。

オルガニストの職務は多岐にわたった。オルガンに異常がないよう保守管理を行うのもその一つで、自らの手に負えない場合には修理の要望を出すことになっていた。当時のプレディガー教会のオルガンはルートヴィヒ・コンペニウス Lidwig Compenius（1603–1671）が 1647 年から 1650 年にかけて建造したもので、1679 年にはバロック式の前面管が追加され、その荘厳さを際立たせた。

オルガン演奏に関しても具体的に定められ、「祝日と日曜の午前午後、そして 9 時の説教後、また同様に毎週土曜の夕刻と通常の晩課の時刻、同じく週日の説教日の同時刻に」<sup>23)</sup> 礼拝で演奏することが求められた。その際には「礼拝の最後までオルガンを弾き、コラール歌唱を間断なく伴奏して、極めて高い技術を持ったオルガニストたちの間で昨今広く行われているようにコラール主題に基づく前奏を行なえるように励む」<sup>24)</sup> ことが期待されている。さらにリサイタルのような演奏披露を行うことも課され、「毎年特別に洗礼者聖ヨハネの祝日 [6 月 24 日] の午後礼拝の後、彼がオルガニストとして受け入れられ採用されたことを思い返すため、すべてのレジスターと音色を用いてフル・オルガンで心地よく鳴り響く調和のもとに 30 分間にわたる演奏を行い、この一年間で彼がいかに職務において向上したかの証をキリスト教の全会衆に対しいわば新たな試験として示すこと。」<sup>25)</sup> とされた。

オルガニストとしての振る舞いも厳しくチェックされた。「この職にある間は、

---

22) Orth (1959: 108).

23) Pachelbel, aaO. VIII. „auff die Fest- und Sontage Vor- und Nachmittags wie auch nach geendigter Neun-Predigt, nicht weniger alle Sonnabende oder zu welcher Zeit sonst die gewöhnliche Vespren gehalten werden, ingleichen uff diejenigen Predigtstage in der Wochen,“

24) Ebd. „biss Zum ende des Gottesdienstes das Orgelschlagen verrichten, die Choralgesänge, welche Er, wie unter den heutigen Bewehrtesten Organisten üblich, vorhero *thematische praeambulando* zu tractiren sich befeissigen wird, durchgehends mitspielen,“

25) Ebd. „Soll Er alljährlich und jedes Jahr besonders uf dem Festtage S. Johannis Baptistae nach geendigten Gottesdienst des nachmittags zum Andenken dieser seiner Reception und annehmung zum Organisten das gantze Orgelwerck mit allen seinen Registern und Stimmen in lieblicher und wohlklingender harmonia eine halbe stundenlang durchspielen, und also für der gesambten Christlichen Gemeinde gleichsam eine neue Prob thun, wie Er sich das Jahr über in seinem Amte gebessert habe.“

---

常に敬虔で平穩かつ世俗から離れた暮らしと生活態度を心がけ、好ましくない交際や必要のない飲酒を避け、唯一至福をもたらすプロテスタントの教えを絶えず固く守ること」<sup>26)</sup>。パッヘルベルはこうした様々な規定に則り、職務上の要求に誠実に応えたと考えられる。そのことは、後述するように、彼がこの地を離れることとなった際に人々が彼との別れを大変悲しみ、またその仕事ぶりに対する賛辞を惜しまなかったことから窺える。

### 3. エアフルト時代の作品

現存するパッヘルベル作品の多くは、情報の乏しさからその厳密な成立年代を確定するのが困難である。しかし、エアフルトでの職務と生活の中から生まれたことが確実なものもある。ここではそうした声楽作品と鍵盤音楽作品を取り上げて、その成立背景を確認しておきたい。

#### 3-1.《表敬の音楽 Erbhuldigungsmusik》(1679 年)

パッヘルベルがエアフルトに来て約半年後の 1678 年 12 月 6 日、マインツ大司教・選帝侯のダミアン・ハルタート・フォン・デア・ライエン Damian Hartard von der Leyen (1624–1678) が死去し、新たにカール・ハインリヒ・フォン・メッテルニヒ＝ヴィンネブルク Karl Heinrich von Metternich-Winneburg (1622–1679) がその地位を継承することとなった。彼は 1663 年レーゲンスブルクにおける帝国会議の交渉に出席し、有能な外交官として力を発揮した人物である。特使としてマインツ司教座聖堂参事会員フランツ・エメリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ブーベンハイムとヨーハン・ルーカス・フォン・インゲルハイムがエアフルトに派遣され、エアフルト総督アンゼラム・フランツ・フリードリヒ・フォン・インゲルハイム Anselm Franz Friedrich von Ingelheim (1634–1695) 臨席のもと、表敬式が行われることとなり、その式典用に各種のアリアから成る《表敬の音楽 Erbhuldigungsmusik》の作曲が市参事会によってパッヘルベルに委嘱された。

1 月 30 日の表敬式は大変な寒さのため、慣例の屋外ではなく、市庁舎の大会議

---

26) Ebd. „Soll er bey diesem seinem Ambt eines Gottseligen, Still- und eingezogenen Lebens und Wandels, je und alle Zeit sich befehligen, ärgerliche Gesellschaft und den überflüssigen Trunk ernstlich meiden, bey der allein seligmachenden Evangelischen Religion ohnaussetzlich beharren,“

場で行われたと伝えられる<sup>27)</sup>。最初にマインツの特使たちが市参事会員と市民によって祝砲と音楽で迎えられ正式に紹介された。公示と通達の読み上げの後、特使たちは統治の代表者である司法官、法律顧問官、市参事会員たちに伴われて大会議場の表敬の座に赴き、式典が開始される。はじめに市の代表者たちによる表敬、すなわち「握手の誓い *Handgelöbniß*」と、指をまつすく上に伸ばした宣誓が行われ、これに他の官僚、市と教会関係の役人と職員が続いた。パッヘルベル作曲のアリア〈そしてこの日 *So ist denn dies der Tag*〉はまさにこの場面で演奏されたと考えられる。新しい君主を讃えたやや大げさな歌詞は、プレディガー教会カントルのフローリアン・シュミート *Florian Schmied*（生没年不詳）が作詞した。曲は弦楽器、通奏低音、トランペット、ティンパニによる祝祭的性格の器楽序奏（リトルネッロ）で開始され、続いて2つの弦楽器と通奏低音に伴奏されたソプラノがアリアの歌詞「そしてこの日」を歌い始める。最後は活気に溢れた合唱となって簡潔に締め括られる。市庁舎会議場での表敬式の後、市民は市庁舎に面したフィッシュマルクトに集まり、特使臨席のもと「忠誠の誓い *homagium*」が読み上げられた。この式典の最中、太鼓とトランペットがフィッシュマルクトを取り囲む3か所、すなわち市庁舎塔のギャラリー、そして他の2側面の建物の2階部分から交互に優美な音を響かせた。これに続き聖母マリア大聖堂で祝祭礼拝が挙行され、テ・デウム合唱の後、3発の祝砲が発せられると街中に鐘の音が響き渡った。使節団は2月3日まで地域代表者たちの訪問を受け、忠誠の誓いを受け続けた。

第二の表敬アリア〈そしていまや忠誠のみ *So ist denn nun die Treu*〉は、追悼と別れをコンセプトとするその歌詞から判断して、おそらく特使の出発にちなんで演奏されたものとヒルシュマンは推測している<sup>28)</sup>。祝祭的な器楽リトルネッロで始まり、通奏低音を伴う二人のソプラノによる二重唱が「そしていまや忠誠のみ」と歌い出す。最後は堂々たる合唱となるが、そこでは新しい領邦君主に対する意欲的で恭順な敬意が表明される。

27) この表敬式を記録した文書や、式典で演奏された音楽の楽譜を含むオリジナル資料の一式は、現在ヴュルツブルクに保管されている（*Staatsarchiv Würzburg: Mz. Urk. Weltl. Schr. 71/82*）。式典の様子は、このオリジナル資料を参照して現代譜の校訂を行なった W. ヒルシュマンによる以下の楽譜の序文に詳しい。Pachelbel (2008: VII-X).

28) Ebd. IX.

これら二つの祝祭アリアはパッヘルベルの全声楽曲中でも傑出した作品というまでには至らないが、正確な創作時期を知り得る彼の最初の作である点で非常に重要である。また音楽学者のエグゲブレヒトが、パッヘルベルによる大規模声楽作品を多く収載し自筆とみられる部分を含む『テンベリ一手稿譜』<sup>29)</sup>のヴァイオリン記号のスタイルとの比較から推論しているように<sup>30)</sup>、少なくともアリア〈そしてこの日〉の美しい署名入り浄書譜（【図像 3】）が自筆であるのは疑いないであろう。ゴータ市の文書館に現存するパッヘルベル自筆の解職願い（1695 年）の筆跡と比較しても、この推論は説得力あるものといえる。

〈そしてこの日〉では、全 8 節の歌詞の末尾に共通して「カール・ハインリヒ、末永く！ Carl Heinrich lebe lang!」との文言がみられるが、皮肉にも事実とはそれと真逆となった。新選帝侯として即位したカール・ハインリヒは、1679 年 9 月 26 日、ミュンスター司教区の南部、オーバーシュティフトで表敬を受けるための旅の途上、アシャッフエンブルクで卒中発作のため急死した。彼の後を受けて、新選帝侯・大司教に選出されたのがエアフルト総督のアンゼラム・フランツ・フォン・インゲルハイムであった。こうして同じ年に二度の新選帝侯表敬式を執り行うという異例の事態が生じたのである。二度目の表敬式のためには 3 曲のアリアが残されている。いずれもパッヘルベルの署名は入っておらず、明らかに自筆と筆跡が異なるものもあるが、『パッヘルベル声楽作品全集』の校訂者ヒルシュマンは、オリジナル資料の伝承形態と楽曲の様式的特徴から基本的には 3 曲ともパッヘルベルの作である可能性を考えている<sup>31)</sup>。12 月 5 日に行われた二度目の表敬式の流れは原則として一度目と同じであるが、表敬の儀式の場が市庁舎大会議場から大聖堂前の広場に移った点（【図像 2】）、そして今回は新総督の就任祝賀も兼ねている点で異なる。歌詞の面で興味深いのは、新総督バッセンハイムを讃えるアリア〈さらばいまこそ留まれ Bleibt es denn nun also〉全 10 節の歌詞の冒頭のアルファベットを繋げると彼の名前を表すようになっている（アクロスティック）ことで（【図像 4】）、人々が工夫を凝らしてこの表敬行事を演出しようとしていたことが窺われる。

29) Vgl. Paech (2006-2: 68–70).

30) Eggebrecht (1954: 123).

31) Pachelbel, aaO. IX. 二度目の表敬式を記録した文書、楽譜類等オリジナル資料の一式もヴェルツブルクに保管されている（Staatsarchiv Würzburg: Mz. Urk. Weltl. Schr. 71/83）。

### 3-2. ペストの流行と《音楽による死への思い Musicalische Sterbens-Gedancken》(1683 年)

こうして市の公式行事の成功に大きく貢献したパッヘルベルは、プレディガー教会の結婚記録によると 1681 年 10 月 25 日、市長の娘バルバラ・ガーブラーと結婚し、翌 1682 年 4 月 21 日には息子のヨーハン・ゲオルクが誕生して受洗している。しかしこの平和な日々は長く続かなかった。ヨーロッパでたびたび大流行し多くの人命を奪ってきたペストがエアフルトに広まり、街を恐怖の底に陥れたためである<sup>32)</sup>。

エアフルトで最初の死者が報告されたのは 1682 年 7 月であった。流行の知らせは先に伝わっていたので、市の医者と薬剤師は事前に良質な酢と火酒を予防薬として調達することを命じていた。この病気は急速に膨れ上がるコブとして現れ、悪寒をともなう高熱と不安を人々にもたらしたが、年代記の伝えるところによれば、家畜をエアフルトに連れてきた肉屋によって病が持ち込まれたという。特別にペスト担当牧師が任命されて病人の世話をし、「通りの女中 Gassen-Mägde」と呼ばれた女性たちが道端の病人に薬と食料を与え、その費用は路地で集められた喜捨で賄われた。近隣の農民たちは感染への恐怖から市内の市場に作物を持って行くことをためらった。市民は市の顧問官の命で街を離れることを禁じられ、従わない者は銃殺すると脅されていた。市場は指定された 4 か所に移され、そのスペースが柵で囲われて、市民は内側に、農民はその外側に留まらねばならなかった。

総督のバッセンハイムは極力疫病を隠蔽しようとしたが、彼の隣家 2 件でペスト患者が出るとトールドルフに逃亡した。無分別がはびこる中、ペーターズベルク司令官は理性的な態度を維持し、彼のおかげで守備隊の駐屯地では一人の犠牲者も出なかった。司令官はこの街を強力な煙が覆っているとマインツ大司教に報告し、燻蒸してそれを追い払い、ペスト患者の遺体は街の外に埋葬することを提案している。ただし、彼が推奨したペスト患者の死体解剖は憤った市民によって妨害された。ペストの空気を銃で打ち払おうとして人を射殺したという珍事も起

---

32) エアフルトを襲ったペストに関する以下の詳細な記録は Orth (1959: 113–114) による。彼は以下の年代記を参照している。Johann Heinrich von Falckenstein, *Civitatis Erffurtensis Historia Critica Et Diplomatica, oder vollständige Alt- Mittel- und Neue Historie von Erffurth*, 1739/ 2. Teil 1740.

---

こった。もっともひどい時期には日々 200 人の犠牲者が出て、1683 年にはブレディガー教区だけで 1557 人がペストで亡くなったが、これは同教区民の 4 分の 3 にあたる。聖職者にも犠牲者がおり、礼拝は何カ月も中断された。1683 年のブレディガー教区埋葬記録には 10 月 9 日にパッヘルベルの妻、10 月 28 日に息子の名が記載されている。晩秋になると突如としてペストは収束し、11 月 20 日には完全に収まった。ペストは住民の半数以上である 9400 人の命を奪い、生き残った者は 7000 人ほどだったと伝えられる。

結婚二年目の妻と 1 歳の息子を同時に失い、さらにはバッハ家を含む多くの音楽仲間たちをもペストに奪われたパッヘルベルの心痛はいかばかりであったろう。こうしたさなかに出版されたのが《音楽による死への思い *Musicalische Sterbens-Gedancken*》(1683 年)である。残念ながらこの曲集は現存しないが、ドッペルマイヤーとヴァルターによるパッヘルベルの伝記から、この曲集には死をテーマとした 4 つのコラール変奏曲(コラール・パルティータ)が収められていたことが知られる<sup>33)</sup>。個々に手稿譜で伝承されている様々なパッヘルベルのコラール変奏曲群のうち、どれがその 4 作に該当するのかについて様々な説が唱えられてきた。しかし、北ドイツ・オルガン音楽の巨匠ゲオルク・ベーム Georg Böhm (1661–1733) の研究過程で 1927 年に J. ヴォールガスツが発見した『ハンブルク手稿譜』<sup>34)</sup>に、死と関連づけられるパッヘルベルのコラール変奏曲が 4 曲揃って収められていたことから、現在ではこれが《音楽による死への思い》を構成した 4 曲であるとみなされている。すなわち、メルヒオール・ヴルピウス作のコラール旋律(1609 年)に 12 の変奏が続く〈わが命であるキリストよ *Christus der ist mein Leben*〉、ヤーコブ・ヒンツェの旋律(1678 年)と 8 つの変奏による〈人はみな死すべき定め *Alle Menschen müssen sterben*〉、ハンス・レオ・ハスラーの旋律(1601 年)と 7 つの変奏による〈心より願い焦がれ *Herzlich tut mich verlangen*〉、そしてセヴェルス・ガストリウスの旋律(1675 年)と 9 つの変奏による〈神の御業こそいとよけれ *Was Gott tut, das ist wohlgetan*〉がそれにあたる。いずれも足鍵盤無しで弾ける小品であるが、その分上声部の細かいパッセージを

---

33) Doppelmayr (1730: 259); Walther (1732: 415).

34) この手稿譜は第二次世界大戦で消失したが、スイスのヴィンタートゥール市立図書館にマイクロフィルムのコピーが現存する。手稿譜資料に関する情報は次の校訂譜の序文を参照。Pachelbel (2011: iv–xii).

---

美しく弾くのは技術を要する。音楽形式が明晰かつ堅固であり、次々と変化する音楽スタイルを弾き分ける必要もある。教会の大オルガンで朗々と響かせるよりは、小集団による親密な祈りの場で奏でたり、オルガニストが自宅で作曲・変奏の技法を研究したりするのに向いた曲集といえるかも知れない。

#### 4. エアフルト時代の教育活動

ブレディガー教会の結婚記録によれば、パッヘルベルは 1684 年 8 月 25 日、銅細工師の娘ユーディタ・ドロンマー *Juditha Drommer* と再婚した。彼らは 2 人の娘と 5 人の息子を得て、そのうち 2 人の息子が音楽の道に進んだ。ここではこの 2 人の息子をはじめとするエアフルト時代の弟子たちについて略記しておきたい。

ドロンマーとの間に生まれた二人目の息子<sup>35)</sup> ヴィルヘルム・ヒエロニムス *Wilhelm Hieronymus* は 1686 年 8 月 29 日ブレディガー教会で受洗した。洗礼立会人はブリュックナー博士で、彼は 1631 年にエアフルトにおける代表者会談で市を代表してグスタフ・アドルフと面会した有名な市参事会員の子孫であった。ヒエロニムスは音楽的才能に恵まれ、同じ通りに住んでいたヨーハン・ゴットフリート・ヴァルター *Johann Gottfried Walther* (1684–1748) とは遊び仲間であった。ヴァルターは J. S. バッハのいところで、歴史的に重要な『音楽事典 *Musicalisches Lexicon*』の著者であるが、のちにパッヘルベルの手稿譜を多く収集しその伝承に多大な貢献をした。ヒエロニムスもオルガニストとして成長し、ニュルンベルク市参事は 14 歳のヒエロニムスのオルガン演奏に 10 グルデンを支払っている。1706 年からニュルンベルクの聖ヤコビ教会で活動し、1725 年にはかつて父が勤めたゼーバルト教会でオルガニストとなった。現存する作品は少ないが、大作である《プレリュードとフーガ ハ長調》が知られる。

ドロンマーとの三人目の息子カール・テオドール *Karl Theodor* は 1690 年、パッヘルベル一家がエアフルトを去った 3 ヶ月後にシュトゥットガルトで誕生した。彼の幼年時代については詳細が判明していないが、父の死後、イギリスを経てアメリカに渡ったことが分かっている。1730 年以降にアメリカの記録に彼の名が現れ、オルガニストとしてボストン、ニューポート、ニューヨーク、チャールストンで活動した形跡がみられる。渡英前に書いたと思われる 8 声のマニフィカトが

---

35) 1685 年に生まれた一人目の息子は死産だった。Welter (1998: 16).



---

現存し、ベルリン国立図書館に保管されている。

この時代にパッヘルベルが、後にオルガニスト・音楽家として活躍する弟子たちを多く育て、影響力のあるオルガニスト・サークルを形成していたとみられることは注目に値する。ヨーハン・ニコラウス・フェッター Johann Nikolaus Vetter (1666–1734) は、パッヘルベルの後を継いでプレディガー教会オルガニストとなり、やがてルードルシュタットに転出した。彼の後を継いだのもパッヘルベルの弟子であるヨーハン・ハインリヒ・ブットシュテット Johann Heinrich Buttstedt (1666–1727) だった。彼は師と同様に優れた鍵盤音楽作品と美しいオルガン・コラールを作曲している。また 1686 年にはアンブロージウスの息子ヨーハン・クリストフ・バッハ Johann Christoph Bach (1671–1721) がアイゼナハから弟子入りするためにやってきた。彼はパッヘルベルのもとで 3 年間学んだ後、アルンシュタットに数カ月滞在して、1690 年からオールドルフのミカエル教会オルガニストとなった。周知の通りクリストフは、1694 年に母が、そして 1695 年に父が相次いで他界したことにより弟のゼバスティアンを引き取って、彼に最初の本格的な音楽指導を行った人物である。

この他にもヨーハン・コンラート・ローゼンブッシュ、ヨーハン・クリストフ・ツァーン、クリストフ・ギュンター・キルヒナー、ヨーハン・ファレンティン・エッケルトといった名が知られるが、中でもエッケルトはパッヘルベルのレッスンで使用した音楽帳を残しており、パッヘルベルの具体的な指導内容を伝える貴重な資料となっている<sup>36)</sup>。こうしてエアフルト時代のパッヘルベルは音楽的才能豊かな息子や弟子たちを多く育成したが、彼らはパッヘルベルの演奏技術と作品を後世に伝えていく担い手でもあった。

## 5. まとめ

1690 年、パッヘルベルはシュトゥットガルトのヴェルテンベルク宮廷オルガニストとなるためにエアフルトを去ることを決意する。教会当局は彼の離職を惜しみながらも、8 月 15 日付で告別の推薦状を発行し、彼が在職中に人々の期待に応

---

36) Vgl. Wolff (1986); Belotti (2001).

え誠実に職務をまっとうしたことを明記している<sup>37)</sup>。

エアフルトでは他にどのような作品が書かれただろうか。当時の重要な音楽家・著述家のヨーハン・マッテゾン Johann Mattheson (1681–1764) は、8つのコラール前奏曲を収めた出版年・出版地不明の『コラール曲集第1部 Erster Theil etlicher Choräle』の印刷譜を所有しているとしてそのタイトルページを筆写しており、作曲者名を「Johann Pachelbel, Praedic. Organista, in Erfurdt.」と書いている。この印刷譜の現物は失われてしまったが、写真によるコピーがベルリンに現存し、そこには作曲者が「IOHANN BACHELBELN. Org: Zu St Sebald in Nürnberg」と記されている。末尾の地名に関する齟齬についてこれまで様々に議論されてきたが、ウェルターが推測するように、マッテゾンが所有していたのは初版譜で、写真として残るのは第2版以降の楽譜であると考えるのが妥当だろう<sup>38)</sup>。するとこの曲集に収められた作品はエアフルト時代に書き溜めたものと推測できるが、コラール旋律の主題を巧みに取り入れた前奏曲であるこれらの作品はブレディガー教会当局の任命書に記された職務内容にも適っている。ただし、こうしたコラール前奏はどこのプロテスタント教会でも求められる音楽であるため、決定的な証拠とはいえない。

この時期にカンタータを作曲・上演する機会があったかは不明だが、手稿譜<sup>39)</sup>の表紙に「Aut. Bachelbel. Erfurt」[原文ママ]とある《わが罪われを苛む Meine Sünden betrüben mich》はエアフルト時代の作であると校訂者のレーダーは明言する<sup>40)</sup>。またパッヘルベルには現存するミサ曲が2つあり、そのうちの一つ《ミサ曲 二長調 Missa in D》はミサ通常文のクレドまでで終わる、いわゆる小ミサ（ミサ・ブレイヴィス）である。こうした小ミサは、ライブツィヒで活躍したJ. S. バッハのケースも含め、プロテスタント都市でも普通に演奏された。問題は完全ミサである《ミサ曲 八長調 Missa in C》の方で、こうした作品がプロテスタントのニュルンベルクで必要とされたかについて校訂者のヒルシュマンは疑問を呈している。その上で彼は、先述の通りブレディガー教会オルガニストの職を引き継いだ

37) この推薦状は現存しないが、マッテゾンがパッヘルベルの伝記で原文を掲載している。Mattheson (1740: 246).

38) Welter (1998: 136–138).

39) Deutsche Staatsbibliothek zu Berlin - Preußischer Kulturbesitz Mus. ms. 16476/10.

40) 以下の校訂譜の序文を参照。Pachelbel (2012: X).

---

ブットシュテットがカトリックとプロテスタント両方の礼拝で音楽を担当したと述べており、またパッヘルベルと同じ構成によるミサ曲を残していることを根拠として挙げ、マインツの影響下にあるエアフルトの方に上演の可能性を探っている<sup>41)</sup>。その他にも、楽器編成が比較的小規模な作品、または資料の伝播・伝承が中部ドイツ中心であった作品は、エアフルト時代に書かれた可能性を一度は検討してもよいだろう。

様式的特徴と作品成立年代との対応関係を明確に示すことは、実際には極めて難しい。しかし、パッヘルベル作品の基礎的研究が整ってきた現段階において、エアフルト時代の成立と推定される作品群をまとめて取り上げて楽曲分析し、さらに後期ニュルンベルク時代の作であることがほぼ確定している作品群の様式との比較を通じて、パッヘルベルのエアフルト時代の作品様式といったものをどこまで指定できるかを慎重に検討する作業自体に、今後のパッヘルベル研究において新たな論点を提供し得るという点で意味があろう。本稿で取り上げた諸作品については、楽曲形式、転調範囲、カデンツの構成法、主題の性格、フーガを含む対位法的書法、和声法、また声楽や管弦楽をともしう作品であれば歌詞の表出法や楽器法といった面からの分析を加え、いずれ稿を改めて論じたい。

### 【参考文献】

- クラフト、ギュンター（1993）「エルフルト」（樋口隆一訳）『ニューグローヴ世界音楽大事典』平凡社、第3巻319～320ページ。
- ヴォルフ、クリストフ（2004）『ヨハン・ゼバスティアン・バッハ』（秋元里予訳）春秋社。
- Belotti, Michael (1997): „Johann Pachelbel“. In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*. 2. Aufl., Sachteil Bd. 7, Sp. 1506–1515.
- Belotti, Michael (2001): Johann Pachelbel als Lehrer. In *Bach und seine Mitteldeutschen Zeitgenossen: Bericht über das Internationale Musikwissenschaftliche Kolloquium*. Hrsg. von Rainer Kaiser. Schriften zur mitteldeutschen Musikgeschichte, Bd. 4, S. 8–44.
- Doppelmayr, Johann Gabriel (1730): „Johann Pachelbel“. In *Historische Nachricht von*

---

41) Pachelbel (2010: VIII–X).

- 
- den Nürnbergischen Mathematicis und Künstlern*. Nürnberg. S. 258–259.
- Eggebrecht, Hans Heinrich (1954): Johann Pachelbel als Vokalkomponist. In: *Archiv für Musikwissenschaft*. Jg. 11/2, S. 120–145.
- Leisten, Norbert (1992): *Erfurt und seine Kirchen*. Leipzig: Benno Verlag.
- Mattheson, Johann (1740): „Pachelbel“. In *Grundlage einer Ehren-Pforte*. Hamburg. Hrsg. von Max Schneider. Berlin: Kommissionsverlag von Leo Liepmannssohn, 1910, S. 244–249.
- Nolte, Ewald V., John Butt (2001): „Johann Pachelbel“. In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2. Aufl., Bd. 18, S. 846–855.
- Orth, Siegfried (1959): Johann Pachelbel — Sein Leben und Wirken in Erfurt. In: *Aus der Vergangenheit der Stadt Erfurt*. Bd. 2, Heft 4, S. 101–121.
- Paech, Katharina Larissa (2006-1): „Johann Pachelbel. Geistliche Vokalmusik.“ Diss. Universität für Musik und darstellende Kunst Graz.
- Paech, Katharina Larissa (2006-2): *Johann Pachelbel. Die Erfurter Erbhuldigungsmusiken von 1679*. Wissenschaftliche Bakkalaureatsarbeit. Universität für Musik und darstellende Kunst Graz.
- Perreault, Jean M. (2004): *The Thematic Catalogue of the Musical Works of Johann Pachelbel*. Maryland: Scarecrow Press.
- Riedel, Friedrich Wilhelm (2002): Kirchenmusik im kurmainzischen Erfurt. In: *Kirchenmusikalisches Jahrbuch*. Jg. 86, S. 85–107.
- Röder, Thomas (2017): Johann Pachelbel der Nürnberger, oder: Die Zufälligkeiten der Überlieferung. In *Kirchenmusikalisches Jahrbuch*. Jg. 100, S. 121–143.
- Schaal, Richard und Günther Kraft (1995): „Erfurt“. In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*. 2. Aufl., Sachteil Bd. 3, Sp. 141–148.
- Seidel, Ulrich (2004): *Erfurt: Rundgänge durch die Geschichte*. Erfurt: Sutton Verlag.
- Walther, Johann Gottfried (1732): „Pachelbel (Johann)“. In *Musicalisches Lexicon oder Musicalische Bibliothec*. Leipzig. Hrsg. von Friederike Ramm. Kassel: Bärenreiter, 2001, S. 414–415.
- Welter, Kathryn Jane (1998): *Johann Pachelbel: Organist, Teacher, Composer. A Critical Reexamination of His Life, Works, and Historical Significance*. Diss. Harvard

---

University. Ann Arbor: UMI.

Wolff, Christoph (1986): Johann Valentin Eckelts Tabulaturbuch von 1692. In *Festschrift Martin Ruhnke*. Neuhausen-Stuttgart. S. 374–386.

### 【楽譜】

Pachelbel, Johann (1901): *94 Compositionen zumeist Fugen über das Magnificat für Orgel oder Clavier*. Hrsg. von Hugo Botstiber und Max Seiffert, Denkmäler der Tonkunst in Österreich. Jg. 8/2. Wien: Artaria.

Pachelbel, Johann (2008): *Arien*. Hrsg. von Wolfgang Hirschmann. Johann Pachelbel sämtliche Vokalwerke. Bd. 11. Kassel: Bärenreiter.

Pachelbel, Johann (2010): *Messen*. Hrsg. von Wolfgang Hirschmann. Johann Pachelbel sämtliche Vokalwerke. Bd. 1. Kassel: Bärenreiter.

Pachelbel, Johann (2011): *Chorale Partitas*. Hrsg. von Michael Belotti. Complete Keyboard Works for Keyboard Instruments. Bd. 7. Colfax, North Carolina: Wayne Leupold.

Pachelbel, Johann (2012): *Concerti II*. Hrsg. von Thomas Röder. Johann Pachelbel sämtliche Vokalwerke. Bd. 8. Kassel: Bärenreiter.

### 【一次資料】

Staatsarchiv Würzburg: *Mz. Urk. Weltl. Schr.* 71/82.

Staatsarchiv Würzburg: *Mz. Urk. Weltl. Schr.* 71/83.

【図像 1】 聖母マリア大聖堂（左）と聖セヴェルス教会（右）。筆者撮影。



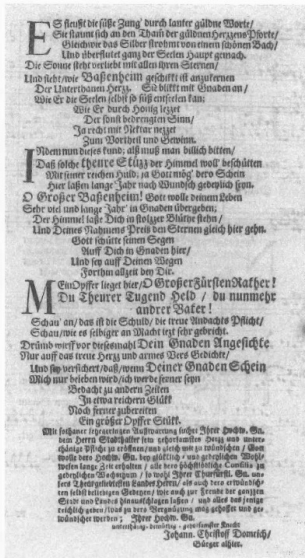
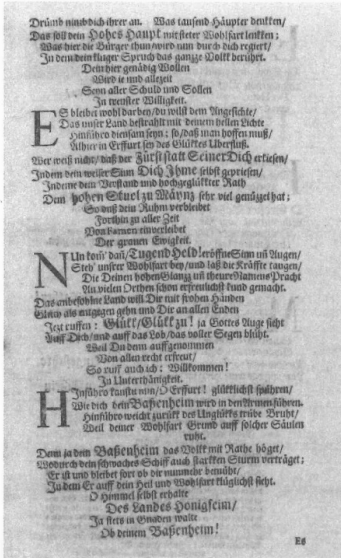
【図像 2】 1679 年 12 月 5 日の表敬式  
(Staatsarchiv Würzburg, Mz. Urk. Weltl. Schr. 71/83.)



【図像 3】《そしてこの日》自筆スコア  
 (Staatsarchiv Würzburg, *Mz. Urk. Weltl. Schr.* 71/82.)



(Staatsarchiv Würzburg, *Mz. Urk. Weltl. Schr.* 71/83.)





●エアフルト時代に書かれたことが確かな作品

〔鍵盤音楽作品〕

作品番号※	曲名	備考
376	〈わが命たるキリストよ Christus der ist mein Leben〉	《音楽による死への思い Musicalische Sterbens-Gedanken》（1683年）
377a	〈人はみな死すべき定め Alle Menschen müssen sterben〉	同上
378	〈心より願ひ焦がれ Herzlich tut mich verlangen〉	同上
379	〈神の御業こそいとよけれ Was Gott tut, das ist wohlgetan〉	同上

〔声楽作品〕

425	〈そしてこの日 So ist denn dies der Tag〉	《表敬の音楽 Erhuldigungsmusik》（1679年1月）
426	〈そしていまや忠誠のみ So ist denn nun die Treu〉	同上
-	〈万歳エアフルト、万歳！ Wohl Ehrfurd! wohl, wohl dir!〉	《表敬の音楽 Erhuldigungsmusik》（1679年12月）
-	〈さらばいまこそ留まれ Bleibt es denn nun also〉	同上
-	〈忠実な務めが解かれて Nachdem die Treue Pflicht〉	同上
364	《わが罪われを苛む Meine Sünden betrüben mich》	カンタータ

●エアフルト時代に書かれた可能性がある作品

〔鍵盤音楽作品〕

205	〈主イエス・キリスト、われ汝に呼ばわる Ich ruf zu dir, Herr Jesu Christ〉	《コーラル曲集第1部 Erster Theil etlicher Choräle》（1693年？）
501	〈明けの明星のいと美しきかな Wie schoen leuchtet der Morgenstern〉	同上
390	〈いまこそ主をほめよ、わが魂よ Nun lob, mein Seel, den Herren〉	同上
475	〈天にましますわれらが父よ Vater unser im Himmelreich〉	同上
506	〈われらみな唯一なる神を信ず Wir glauben all an einen Gott〉	同上
101	〈これぞ聖なる十戒 Dies sind die heiligen zehn Gebot〉	同上
221	〈イエス・キリスト、われらの救い主 Jesus Christus, unser Heiland〉	同上
478	〈高き天よりわれは来たり Vom Himmel hoch da komm ich her〉	同上

〔声楽作品〕

357/ PWV 1301	《ミサ曲 ハ長調 Missa in G》	完全ミサ
---------------	----------------------	------

※作品番号は以下の目録に準ずる。Jean M. Perreault, *The Thematic Catalogue of Johann Pachelbel* (Maryland: Scarecrow Press, 2004).  
宗教声楽作品については以下の論文における新しい番号（PWV: Pachelbel-Werke-Verzeichnis）も併記した。

Katharina Laissa Paech, *Johann Pachelbel, Geistliche Vokalmusik* (Diss., Universität für Musik und darstellende Kunst Graz, 2006).

